

藤馬龍太郎会誌
発 同志社大学法学部「藤馬会」事務局
行 〆 (0720) 33-8635

第9号

龍のおとし子

1998年2月 (題字・藤馬龍太郎筆)

年会費(1500円)の振り込みは…
口座名:同志社大学藤馬会 田中康博
(宇治市木幡御蔵山39-390)
富士銀行 出町支店 普通 1538207
住友銀行 伏見支店 普通 774027
京都銀行 六地藏支店 普通 856895
京都中央信用金庫駅前支店 普通 0582105

私の愛読書

同志社大学教授 藤馬龍太郎

またたく間に一年が過ぎ
てしまいました。過ぐる年
は余りにも速く駆け行っ
たように思い、また果せず
残した課題も多い一年でし
た。多忙だったとは口実で
自らの努めが至らなかった
と反省しているのですが、
さて藤馬会の会長として
の責務も又然りで懸案の課
題は現役生卒業後の運営に
ついてであります。

藤馬先生の漢刺とされた
御様子を伺っていると、と
てもそのような時期に来て
いるのだということが、正
直に現実感がなくて、つい
今日まで来てしまったとい

人には必ず何冊かの愛読
書があるものである。昔の
人はこれを枕頭の書といっ
た。もし、ロビンソン・ク
ルーソーのように絶海の孤
島に漂着したときに、たっ
た一冊だけ持っていくこと
が許されるとしたらならばど
んな書物を持っていくか、
と尋ねられたら、あなたは
どう答えるだろうか。信仰
篤きクリスチャンなら即座
に「聖書」を挙げるかも知
れない。しかし、幸か不幸
かクリスチャンでない私は
一冊だけといわれると困っ
てしまう。R・M・リルケ
の『マルテの手記』は手放
したくない。A・ランボー
の詩集『酔いどれ船』も、
J・P・サルトルの『嘔吐』
も捨て去りたい。堀辰雄
の『風立ちぬ』も学生時
代に信州追分の辺りを彷徨
て詩人を思ふた忘れ難い思
い出をもつ。九鬼周造の詩
集『巴里心景』や哲学書
『偶然性の問題』は、私に
とってまさしく枕頭の書だ
。「バリ」に関する写真集や
歴史的文献、随想集などの
収集も、秘かな私の自慢で
ある。

職業柄、本を読むことは
好きである。専門の法律書
は、一度や二度食事を節約
してもほしいものは入手し
ている。しかし愛読書とい
うからには、繰り返し読む
ことによって精神的な成長
を感じます。しかし一方
で予てより会員の福塚さん
を中心として新しい運営案
作りを進めていたおいてお
ります。具体的に実行出来
るにはまだ少し時間が必要
かと思われまふ。

今年で十二回目の総会を
迎えるのですが、四月より
格がないものである(一
六五頁)という著者の言葉
に出会った。愛読書の一冊
も有しない人は思想的に信
用のおけない人である、と
三木清はいいたかったのだ
であろう。やうと精神の遍歴
が始まるうとしていた一七
才の少年に、この三木清と
いう人物についてふかく知
りうる等もなかった。彼は、
西田哲学の俊英であり、法
政大学の哲学の教授であっ
たが、あるマルキストの友
人を自宅に匿したことが特
高警察や憲兵の知るところ
となり、二〇年三月二八日
に治安維持法違反容疑で検
挙され、網走刑務所に未決
囚として収監、敗戦によっ
てようやく自由の身となる
直前の九月二六日に惜しく
も獄死したことは、当時の
新聞などではじめて知った。
この書物は、哲学者三木清
の文字通り読書遍歴であり、
彼の精神の成長過程を彷彿
とさせるものであった。



読書は体験を予想する。
自ら真剣に生き、真剣に思
索する者にこそ、真の読書
は効果がある。その意味
で、愛読書をもたない人生
は空虚であり、淋しい限り
である。

第十二回藤馬会総会に際
し、役員の方々の深甚な
ご尽力と、会員の皆さんの
ご協力に、心から感謝を申
上げます。

自分自身の行く道

大学院法学研究科 西山智恵

四月に同志社の大学院に
入学してから、現在講義館
の研究室の机を使わせてい
ただき、日々勉強に励む毎
日です。
大学院に入ってからよかつた
と感じたことは、大学院が
自分にとって、さまざまな
角度からじっくり物事を考
える機会を与えてくれる場
所であるということです。

家庭の教育力の復活を

島 壮二郎

今、教育界では心の教育
が叫ばれている。世界中が
大切にしてきた「心」って
なんだろう。戦後、核家族
制度が取り入れられ、親と
子だけの家族が多くなつて
きた。少子化が進んでいる
中でも新しい住宅がどんど
ん建っていく。そして、若
い母親の中には子育てに悩
みをもち、子供の成長に伴っ
た教育(躾)がわからず、
時には放任したり虐待した
りして社会を賑わしている。
教育講演会等で話を聞いた
後、「もう少し早くこの話
を聞いておけばよかったの
に、今となっては手遅れだ
わ」と異口同音によく聞か
れる。現実には、聞かせた
い親に限って積極的に講演
会等には参加しないのが普
通であるが。

厳格な

仕事人たる

福田 幸治

現在私は預金保険機構大
阪特別業務部に勤務してい
ます。九年七月に大阪国税



北から・南から

局から出向して以来、検察・
警察・裁判所・大蔵省・日
銀・銀行各々からの出向者
や弁護士連と一体となり、
旧住専の不良債権回収や木
津信組、阪和銀行などの破
綻金融機関の債権等の処理
及び整理に日々汗を流して
いるところです。「明治近
代政府始まって以来」とい
う幹部の発言のとおり、
まさしくバブル崩壊後の様々
な金融上の諸問題を官民一
体、諸氏渾然となり、回収・
整理・処理そして秩序維持
という目標に向かって突き

ピュアな空気

辻田 圭一

決して勉強好きではなかつた
私が、学生時代には大学

多いこと、発表した内容に
対し、鋭い質問や答えが返
ってくるため、よくも悪くも
そのテーマにつきより深く
考えることが出来ます。他
外国語文献や判例を読んだ
り、社会問題を学問的見地
から考えたりと、その気
になれば幅広い学習が可能と
なります。

自分から考えられたこの環
境を最大限に生かして、自
分の夢に少しでも近づける
ように、努力してゆきたい
と思う今日この頃です。
(93年度生)

四回生活動報告

すべての始まりは
これから



突然決定された就職協定廃止で混乱気味にスタートした今年度の就職戦線は、採用の早期化・長期化、新しい採用方式など様々な変化を生む結果となりました。私の記憶が正しければ、就職活動が一気に加熱したのは某資生堂が「三月選考開始、四月内定」を発表した頃だと思えます。ニュー・ス番組も特集を組み、就職課で資料を読む学生の姿が連日報道され、一躍今年の就職活動が注目されることとなったのです。結果的に前払いになる可能性も出てきたのです。

このような状況の中、ゼミは資格・公務員受験者を中心に運営され、五月下旬頃からゼミの仲間も徐々に就職戦線から帰還してきています。その一方で採用の長期化を反映して八月、九月まで活動を続ける人もいます。

様々な変化と混乱を生み出したものの、早い段階で自己分析が求められるもの、自分がどんな業界に向いているのか、どんな仕事をして

たいかを真剣に考えることができたのは協定廃止のおかげであるとも言えます。当たり前かもしれないですが、これからがすべての始まりであることを強く感じました。

最後になりましたが、昨年の藤馬会をはじめアドバンスをして下さった先輩の皆さんに御礼申し上げます。支援助を願って、四回生活動報告とさせていただきます。

4回生 河野・岡本 (94年度生)

優勝！ボーリング大会

4回生 加藤 友紀



去る11月20日、ゼミ対抗女子ボーリング大会が高野スタレーンで行われました。私たちのゼミからも先日参加したソフトボール大会で惜しくも初戦敗退したこともあり、「今年こそ応援団の岡本君、目黒君も参加して練習。しかし、エ

結果、見事優勝。一人のミスを決めた一人がスペアでカバーするという涙ぐましい友情のもたらした快挙でした。どのチームより大声で励まし合い、喜び合っで、最高の思い出ができました。

(94年度生)

エメラルドの思い出

水谷 亮子

藤馬会の皆様におかれましては、お元気でございましょう。突然「龍のおとし子」に寄稿させて頂くことになり、何を書こうかと悩んでいたところ、偶然にも、四回の旅行がイデオロクを見る機会があり、そこに見覚えのある写真を発見しました。その写真を発見したとき、おとし子に深く印象をあたえておりました。

現在、私は化粧品メーカーに勤務し、憲法よりも、むしろ民法・商法・旅行で大歩危遊覧船に乗った時の写真が掲載されていたのです。思わず懐かしく写真を見入ってしまいました。大歩危は徳島県の吉野川上流の祖谷渓谷にあり、エメラルドグリーンの川面が美しく、シラカバを編んで造られた風情のある吊橋があり、とても景観のよいところでした。私たちのゼミが旅行先を四回に決めたのは当時できたばかりのレオマワールドに行くためでしたが、レオマワールドは、アジアの文化遺産を再現した一角があり、藤馬先生と一緒に見学した後、藤馬先生が「文化の薫り高い散策ができたね」とおっしゃったことを印象深く覚えておりました。



東から・西から

社会人一年目に思う事

池田 真弓

昨春、卒業式を終え、まだ一年も経っていないというのに、この度「龍のおとし子」に寄稿させて頂いたのですが、幾つかの得意先を担当し、定時を過ぎてから取引先へ出かけた時、九時一〇時までの残業もしなければならず、慣れない故の失敗も多く、学生時代の不勉強がたたって、営業実務に必要民法、税法、財務に頭を痛めているような有様ですが、それでも充実した日々を過ごしています。

藤馬先生の元で「法律」といわれる憲法を学び、合同ゼミで発表させていただいた事。また、クラブ活動においては邦楽部に入学して争を習い、演奏会を催した事。そしてその中

三回生活動報告

出会い、大切に

私達三回生ゼミは、男五名、女二名の合計四名です。四月、藤馬先生やゼミの仲間と初めて出会い、本年度三回生ゼミが始まりました。

まず、自己紹介を兼ねたゼミ名簿を作ることにしてお互いを知り合うことができた。そして、コンパやゼミ対抗ソフトボール大会、ゼミ旅行といった様々な活動を通じて親睦が深められていきました。特に、ゼミ旅行は思い出深いものとなりました。

本年度のゼミ旅行は、九月一日から一八日までの三日間をかけて、上高地・白馬・黒部へ行ってきます。

一日目は京都から上高地までのバスでの移動の旅となりました。

二日目は、午前中に上高地を散策しました。藤馬先生を先頭に河童橋から明神池まで歩いて、澄んだ空気と上高地の雄大な自然を満喫しました。それにしても、藤馬先生の歩くペースの速さには、驚かされたと同時に見習うべきだと思えました。午後には上高地をあとにして白馬へ向かい、その夜は外でバーベキューをして、賑やかな、楽しい時を過ごしました。

三日目は、黒部ダムを訪れました。歴史ある黒部ダムの雄大な眺めに感動しました。

このようにして、ゼミ旅行は非常に有意義なものとなりました。

後期の授業では、これら様々な活動のおかげで、前期に比べゼミ生一人一人が自らの意見を述べるようになってきました。

藤馬先生は、四月の最初の授業で「このゼミでの出会いを大切にしてください」とおっしゃいました。私達三回生もこの言葉を胸に刻み、これからも全員でよい思い出を作りたいと思います。

3回生 泉・佐々 (95年度生)



編集後記

～事務局より～

藤馬先生をはじめ、先輩、現役生の皆さんに御協力頂き完成しました「龍のおとし子」第9号、いかがでしたでしょうか。年代も全く異なる人同士が「藤馬会」という縁を通じて、仕事の話をしたり、就職活動の相談をしたり、同意会だけでは味わえない、これこそOB会の面白い部分ではないでしょうか。

今後社会のあらゆる分野で過去の規制が取り払われ、大変革の時代を迎える、と言われていますが、藤馬会で得た「つながり」は変わらないうちに欲しいと思います。

4回生 河野浩資朗 (94年度生)

